
ゼータの見る夢

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼータの見る夢

【Nコード】

N4304R

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

世界を変えることのできる力をもった『ある物』と、それを探す組織の話。

「アルファという犬」の続きの話です。

夢の話

最近よく夢を見る。

塔の夢だ。

気になって、本屋で夢占いの本を立ち読みした。

占いの本なんて、男が読むのはやっぱり珍しいのだろうか。
チラチラと定員が様子を伺っているのが恥ずかしかった。

塔の夢

権力・男性欲の象徴

塔を昇っているのは目的に向かっていている事を指す。

塔が崩れる夢は、自分のプライドや地位に危険があること。

「違う。」

俺は、本を戻した。

自分の探している答えが見つからなかった。
どれも、納得できなかったのだ。

まだ。

塔の夢を見た。

石造りの塔。

俺は、壁を触った感触まで覚えている。
下から突き上げるような強い風も。
自分の名前をを呼ぶ者たちの声も。

俺はたまに思ってしまう。

もしかすると。

今こうしている時分が夢の中で、

夢の世界が本当の世界なのではないか、と。

少年と別れ、男と出会う

首都圏から少しだけ離れた場所に、木々に覆われひっそりと佇む施設がある。

見た目は小さなコンクリート剥き出しの建物だが、その大部分は地下にあり、中に入るとこの組織がただの研究施設ではないことが解る。

未知能力開発研究所は、表向きは教育関係の団体だが、裏ではまだ解明されていない不可思議な現象を研究・解明している。

古林美智子は、その職員だ。

「直人君、元気にやっているかしら。」

「さあ、どうだろうねえ。転校先でまた、いじめが無ければ良いが。」

「

立派な髭を撫でながら答えたのは、未知能力開発研究所の局長、榛原だった。

局長室は、地下二階にある。地下なので窓は無いが、閉塞感を感じないようにと空の写真が飾られてある。写真が趣味の榛原が自分で撮影したものだったが、古林にはあっても無くても代わりは無いのでは、と言いたいのを我慢しているようにも見える。

「古林君、あんまり大胆な行動はとらないでくれよ。表向きは、私の秘書なんだからね。」

「解っていますよ、局長。」

淹れたてのコーヒーを、局長に手渡しながらにつこりと古林は笑った。タイトなスカートから伸びた足は高いヒールの靴によって支えられている。カツカツと鳴る音は女性でも簡単には真似出来ない。美しい足が折りたたまれると、古林の艶のある髪の毛が揃って揺れた。

「直人君は、自分で『あれ』を手放すことを望んだんですから。私だって大人です、軽薄な行動はとりません。それより・・・。」

美智子が、鞆から出した書類を局長に差し出した。

「ギリシャからわざわざ教授にお越しいただくまでもありませんわ。どうやら、彼ではなさそうですし。」

分厚い報告書にじっくり目を通した後、局長は残念そうに報告書を乱暴に机の上に置いた。

「そう、ほいほいが見つかる物ではないよ。あれは。」

『あれ』とは、未知能力開発研究所が探している『ある物』のことである。

それは、世界を変えることのできる力を持っているが、どんな形をしているかは様々で、剣の形をしていたり、スリッパの形をしていたり、あるいは犬であつたりする。

「MNKでは、まだ三体しか確認できていないからな。」

局長がため息をついた。MNKとは、組織の略名である。

MNKの本当の目的は、この『もの』を探すことなのだ。

古林は、その『もの』を探すことが仕事なのだ。

「私、しばらくお休みを頂こうかと思っっているんですけど。」

「またかね。」

局長は、猫舌なので手に取ったカップにしばらく口をつけていなかった。勇気を出して唇を乗せてみたが、ねずみのような鳴き声を出してカップを置いた。

「君は、大きな仕事が終わると、いつも休暇をとっているが一体何をしてるんだね。旅行でもいつているのかな？」

「ええ。まあ、そういうものですよ。」

「まさか、単独行動でもって『あれ』を探しているのではないだろうね。」

間を合わせたように、局長の机の上にある電話が鳴った。
レトロな黒電話は、会話の中断を求めているようだ。

「何だね？」

局長が、面倒くさそうに受話器を取る。

「は。」

古林は、それまで聞いたことの無い局長の、あまりに間の抜けた声に耳を疑った。

「例の男が、わかった。」

「一体どうしました。局長。」

「いや、何。表に不審者がいるようだ。すぐに、立ち去るだろう。」

「不審者？」

「君には関係ないよ。」

古林の眉間に皺が入った。

「どうして、私に関係があるんですか？」

「何も言っていないだろう。」

「じゃあ、どうしてそんな風におっしゃったんですか？」

「。。。。」

「局長。」

古林は無理やり黒電話を奪い取り、ダイヤルを回し始めた。

「もしもし？警備の方ね。秘書の古林ですが、表に不審者がいるって聞いたんですけど、どんな様子なの？」

しばらくした後、古林は受話器を置いた。

局長は、ばつの悪そうな顔をしていた。

「最近何度かMNKにやって来たんだよ。」

「どうして言って下さらなかったんですか？」

「君が居なくなると、私が困るんだよ。」

「辞めるわけ無いじゃないですか。」

「本当かい？」

「ええ、勿論。そんな事でこの仕事が嫌いになったりはしませんよ。」

まるで、夫婦の様な、まったりとした会話が続いた後。

「でも、一度会ったほうがいいかもしれないですね。」

古林が、ソファから立ち上がった。

『美智子くんに会いたいんだけどお』と、いつて毎回やってくるらしい。

「正直、気持ち悪いんですけど、どんな男か顔を見てみましょうよ。」

古林の顔に、不気味な笑みが広がっていた。

汚い男

「出張帰りだったの。冷蔵庫を開けたときに、食べるのを忘れていたサーモンの刺身の色が変わっていて、とても食べられたものじゃなかったわ。」

まず、古林の表情を変えたのは、その臭いだった。

「もしかして、それと同じ臭いだったなんて言わないよね？」

「言わなくても分かるでしょ。」

乱暴にバスタオルで頭を拭きながら、声の主は髭剃りに手を伸ばした。

つい、三時間前。古林がM N Kの玄関で見た男は、受付の机で肘を付いて待っていた。身長が高く、さりげなく足を組んでいる様子は、雑誌で見る紳士服のモデルのようだった。ただ、格好が問題だった。

破れた服、伸びた髭、洗っていない体からは、異臭が立ち込めていた。声を聞く限りでは年齢はまだ若い様だが、明らかにそれは浮浪者の井手達だった。

「やあ、美智子くん。今日も可愛いね。」

電話を受けて、すぐ局長室から駆けつけた古林を、さも知り合いのような挨拶（？）で男が両手を広げて近づいてきたものだから、その場に居合わせたM N Kの職員らが一斉に古林の傍から離れた。両手を広げるということは、抱きしめる準備なのではと、誰もが恐怖したからだ。

「私、ホームレスに知り合いなんていないですけど。」

古林の第一声は、冷たい大理石の床に響き渡った。

男は、残念そうに両手を下ろした。

「冷たいなあ。僕たちの仲じゃない。」

「何言ってるの、この人。警備さん、つまみ出して。」

いつ言われるのかと、待っていた様に二人の警備員が飛び出してきた。マスクをしているのは、やっぱり異臭のためだろうか。

「美智子くん。ぼくだよ、ぼ・く。」

男は、くしゅんと可愛いクシャミをした。ポケットから汚いハンカチを取り出し鼻をかみ、丁寧に折りたたんで元に直した。

「ああ、そっか。警備のおじさんに止められたのは、この格好の所為なのかあ。」

警備員が、男の両端に立って取り押さえようとするが、汚れた服の何処をどう触ろうか、と悩んでいるようだった。「警備員の癖に躊躇するなよ」と、心の中で舌打ちする古林を見透かしているのか、男は片方の口角を上げて笑った。

悪戯っぽく笑う顔は、古林の記憶の中のある情景と重なった。

古林と目が合った男は、嬉しそうに笑ってみせた。

「あ、今。僕の事、思い出してくれたんじゃないの？」

「え。」

「そんな顔したよ。美智子くんは。」

美智子くん

そういう風に古林を呼んだのは、彼女の覚えている限り一人しかいなかった。ただ、あまりに昔の事だったので、自信が無いのだ。

やっとの思いで警備員が男を捕まえた。腕を掴んだ途端、黄色い粉塵が空を舞った。

「うわあああ。」

「情けない、警備員ね。」

古林が、溜息をつき男の方へと近づいてゆく。

長い足は、何かを確かめるように、いつもよりゆっくりとしたリズムで大理石を叩いている。片手で鼻をつまんで、まじまじと男の顔を見ると意外と整った顔だったので、まるで品定めをするように目が細くなった。

「まどろっこしいなあ。」

男の力は意外と強く、古林の肩を掴んだ。いつもは、大したことでは表情を変えない古林だが、あまりに突然だったので小動物の様に怯えた表情になった。男の顔が古林の顔に、あともう少しで触れるくらいの所。

「僕の顔を見たいんでしょ。遠慮しないで、もっと近くで見ればいいじゃんか。」

古林は、確信と不安の籠った目を彼に向けた。彼女の瞳に男の顔が鏡の様に映る。その瞬間、内側からキラリと光のような、それはまるで、十代の少女の純粋な瞳が彼女の中に現れたようだった。

「ワン」

男も古林も自分の身に何が起こったのか分からなかった。男は床に倒れ、俯せになった背中には真つ黒の大型犬が男を座布団のようにして『おすわり』をしている。気の弱い警備員は突然現れた犬に驚いて二・三步退いてしまった。

二人の間に割って入ったのは、両者が良く知っている犬だ。

「アルファ?」

アルファと呼ばれた犬は、大きな欠伸をした後、伸びをして背中をかき出した。黒い毛が数本、風に舞うと古林は思わずくしゃみをした。

「ちよっと、重いんだけど。」

男と犬の目が合うと、犬は男を見下す形で「ふんっ」と鼻を鳴らした。まるで男の事を笑っているようだった。

「ワオン」

何かを訴えるように、もう一度吠えた。

「とりあえず、場所を変えましょう。」

我に返った古林が、元の冷静な『古林』に戻るのにはそれほどの時間はかからなかった。警備をどかせ、職員たちがざわめく中、三人はエレベーターに乗り地下へと降りていった。

「仕方が無いじゃない。三ヶ月かな、お風呂に入ってなかったんだよ。もう、やってらんないよね。」

古林は、ワイシャツとズボンを椅子に放り投げた。

MNKの施設は地下に広がり、まるで迷路のようだ。万が一の時にはシェルターとしても利用できるように生活に必要なものはすべて揃えてある。これは表向きには知らされていないが、MNKの施設は全体の八十パーセントの部分が地下にある。これは、衛星から組織の巨大さを悟られないようにするために隠されているからである。

「それにしても。本当にMNKって、よく分からない組織だよ。お風呂は他の会社にもあるかも知れないけど、あんな物やこんな物まであるんだよね。」

「秘密の組織なのよ。」

古林が、上着を脱いだ。さっき肩を握られた部分に消臭剤を振り撒く為だった。

「組織が存在している事が知られると、困る事があるんだよ。」

低いバリトンの声が部屋に響く。

「それって、何なのさ？アルファ。」

着替え終わった男が、さっぱりした顔で椅子に腰掛けた。

「まず、お前の名前を聞きたい。」

男が濡れた髪の毛を掻き揚げた。ウェーブのかかった髪から細かい雫が飛んだ。子供の様につまらなそうな顔をしていた。

「わざわざ、ギリシャから空間移動して来てやったんだ。教えて貰わないと困ったことになるが・・・。」

一応説明しておくが、アルファはただの言葉の話せる犬ではない。世界を破滅させることのできる力を持っている、とんでもない犬なのだ。

男は観念したようで、口を開いた。

「東西 南。」

「からかわないで頂戴。」

古林がドライヤーを投げつけた。

「ちよつと、危ないじゃないか。」

「本名じゃないわ。」

「言いたくないんだよね、長い名前だから。南ちゃん、って呼んでよ。」

男、いや、南は少女漫画のようなウィンクをきめて見せた。ワイシャツは、どこにでもある物だったが、何故だろうか高級なブランド物のようにも見えた。骨ばった手首を折り曲げて自分の顎を置いた姿は、古い映画の俳優さながらで古林の調子を狂わせる原因でもあった。

「名前を聞いたのは、話を進めるのに面倒だったからだ。偽名でも何でもかまわない、南。」

「アルファは、いつも僕をそう呼んでいるよ。」

「そうか、では。そうしよう。」

古林が首を傾げた。

「アルファは、この人と面識があるのかしら？」

「まあ、そうとも言える。実際、一度だけ会った事がある。」

「僕は、何度も会ってる。もちろん、美智子くんともね。」

「どうということよ。」

南は、古林の困った顔を見るのが好きらしい。悪戯っぽく笑うと人差し指を立てて唇にそつとあてた。

「これは、なぞなぞだよ。美智子くん。」

古林には、考えても答えを見つけない。アルファはその答えを教えてくださいる親切な犬ではなかった。

身なりを整えた男は、古林が過去に出会った事がある『あの男』に間違いは無かった。髪は少し伸びたようだが、当時そのままの顔だ。あの時からもう十年は経とうとしている、彼の顔は十年の時を感じさせないくらい同じ顔立ちだ。本当に、一切歳をとっていないようだ。

「まさか。」

「そのまさかだよ、美智子くん。」

南は、にっこりと笑った。

「ちなみに言えば、僕は『あの日』からすぐ此処にきて、三ヶ月しか経っていない。僕の本来いるべき時間は、この時間の三年後になる。つまり、未来から来たんだよ。」

「趣味は、時間旅行かね。」

アルファの声は冷たかった。

南は、寂しそうに笑った。

「いつもは、二人旅なんだけどね。」

事實は小説よりも奇なり

「僕は覗きが趣味なんだ。」

南は手を望遠鏡の様に目にあてててみせた。

「知りたいことが沢山あるんだよ。本でしか知る事の出来ない事柄は、そればかりが事実という訳じゃないだろう？大袈裟に言ったり嘘だったり、結局はよくわからなかったりするじゃないか。何とつか、そういう、ぼんやりとしたのが嫌なんだ。」

古林は腕を組んで壁にもたれたまま、部屋の真ん中にある椅子に座っている彼の近くへ行こうとはしなかった。

「だけど、それは仕方が無い事よ。情報というのは人を介して誇張されたり、捻曲げられてしまうものよ。」

「日本人は灰色が好きだもんね。」

「なによ。あなただって日本人じゃない。」

南は椅子に座ったものの、どこか落ち着かない様子だった。部屋をきよろきよろと見回したり足を何度も組み替えていた。

「煙草が吸いたいのなら、外よ。」

「ちがうよ。」

「じゃあ、お腹でも空いたの。」

「あ、いや。」

大の大人が、子供の様に頬を紅くして笑った。

「僕を子供みたいな奴だと思ってるんでしょ。」

「良識のある大人だとは、思っていないわ。」

冷たい言葉に胸を痛めたのか、死んだ魚の目をした南は、まだ乾ききっていない髪の毛を指でいじり始めた。

「美智子くんは、初めて会った時から冷たいよね。まあ、この時の僕はまだ君と会っては無いけどね。」

「未来から、来たって言っただわよね。」

「僕は『持ち主』だよ。」

南は、指に絡まって取れなくなった髪の毛に苛立ったのか、説明するのが面倒だったのか、恐らくそのどちらもが彼にストレスを与えているのだろう。

「美智子くん、知ってるでしょ。『あれ』は何でもできる力を持っていて。選んだ『持ち主』の願いを叶えてくれる。僕が未来で君たちと会ってたつて、過去や未来を自由に行き来したつて、可笑しいことは無いじゃないか。」

古林は、ちらりとアルファを見た。アルファも、古林を見ていた。ただ、彼女とは違い『何か』を知っている風だった。

「私は、まだ彼を信用できないわ。アルファは、この人の何を知っているのかしら？」

黒い犬は、長い尻尾を横にゆったりと振った。

「そうだな、たしか君を十年前からこの時間に飛ばしたのは私だったかな。」

退屈なのか南は、椅子をガタガタと揺らし始めた。

「覚えてないの？酷いニューフランドランド犬だな。」

アルファは、答えずに床に伏せた。眠たそうに目をとろんとさせている。

「あの日に、古林君と会っていたのは知らなかったが。」

古林は、顎のラインで切り揃えられた髪を耳にかけた。

「アルファでも、知らないことがあるのね。」

「十年前もそんな台詞を聞いた気がするな。」

「僕が言ったんだよ。あの時にね。」

昔は、髪を腰まで伸ばしていた。

十年前のあの時、まだ高校生だった古林はプラットホームで電車が来るのを待っていた。線路に飛び込んで、自ら命を絶とうとした

のだった。

電車の音が近づいてきた時、怖くて震えて、どうしてもあと一歩が踏み出せなくっている彼女に、

『ねえ、早く飛び降りないと間に合わないんじゃない？』

心を読んだような言葉が、古林を呼び止めた。

それが、東西 南だった。

彼は、笑いながら古林の目の前で飛び降りて見せたのだ。電車に轢かれた南を、古林は一番近くで見たはずだった。

「でも、あなたは時間を戻して生き返って、なにくわぬ顔で私の目の前に現れたわ。私をからかってやった事だったの？」

「僕のシヨ―は面白かっただろ。」

「馬鹿な真似して、『歪み』の事なんて考えてなかったの？」

南は、困った顔になった。

悪戯がばれた子供のようだった。

「事実を捻じ曲げると、世界に歪みが起こる事は、知っていたのね。」

「ばつが悪そうに視線をそらす。」

「知ってたよ。あんな大人数が関わった事に手を加えたのは初めてだったけど。だけど、大したことは無かっただろ。ちよつと地面にヒビが入った位だったじゃないか。電車にも影響は無かったし、線路が曲がったくらいで・・・」

ばしん

古林の手が、南の頬を叩いた。

アルファは、目を閉じて動かない。

「親にも叩かれた事無いのに・・・。」

「じゃあ、その親を恨む事ね。」

まだ、若い女性の手が赤く腫れている。痛みを我慢している姿は南の心を痛めたようだ。彼には殴られた部分など、むず痒い程度だったが、彼女の瞳が潤んでいるのを見た瞬間、母親に怒られた子供のお決まりの台詞を吐いた。

「ごめんなさい、もうしません。」

これが、南の精一杯の謝罪なのだ。

「おや？一人かね。」

南は、やっと目覚めたアルファの顔を見るなり、見た目より酷く歳をとった表情を作った。

「酷い顔だな。論文で行き詰っている時の教授そっくりだ。」

「美智子くんは、また戻ってくるよ。局長に呼ばれたんだ。」

笑った顔にも、元気が無い。アルファは、南の足元に座って彼を見上げた。

「一人は、嫌いかね。」

「うん。シャクに会いたいよ。」

「シャク？」

「ああ、ごめん。ゼータの事。そう呼んでるんだ。」

「そうか、ゼータの『持ち主』だったのか。」

「うん。『赤』っていう漢字は、『しゃく』って難しい読み方もあるって知ったから。ほら、赤い目をしてるだろ、あの子。」

アルファは、鼻を鳴らした。何処か、気に食わないようだ。

「お前こそ、何でも知っている気がするが。我々の事をどこまで知

っているんだ。」

南は、アルファの頭を撫でた。気持ちよさそうにアルファが目を閉じる。黒い耳に顔を寄せて、南はアルファと自分以外に誰もいないはずの部屋で、小さく聞き取れないくらい小さな声で囁いた。

「事实は、小説よりも本当に面白いよね、アレフ。」

夢の続きを

俺は、頭がおかしくなったのだろうか。

もはや、どちらが現実なのか夢なのか判別がつかなくなってしまった。

「。。。。」

また、俺を呼んでいる声。
階段を駆け上がる足音。

長い階段は、体力を奪う。

荒い呼吸を整える余裕もなく、俺は用意された椅子に座った。

「さて。」

この、目の前の男は誰だっただろう。

自分の横には、よく見知った人間がいる。
遅れてきた俺を小馬鹿にした目。

この目が俺は、とても嫌いだ。

「今日来てもらった理由は、皆すでに解っているだろう。」

向かいにいる男が片腕を高く挙げた。
同じように我々も腕を挙げる。

おめでとう
おめでとう

大変だ。

塔が崩れてゆく。

早く、
逃げなければ。

しかし、
どこへ？

そうだ。

もう一つの夢の中へ。

真夜中の二時（前書き）

3月28日：加筆しております

真夜中の二時

地下にいますと、時間を判断するのは時計の指す方向のみになる。恐らく夜中の二時だろう。昼夜の判断はアナログではわからなかった。

「まだ、起きてたの？」

古林が戻ってきた。手には毛布を持っている。

「普段から、あんまり寝ないんだ。」

南は、優しく笑った。寝ているアルファを起こさないよう小さな声を心にかけているようだ。

「二日に一回とか、一週間くらい寝ない時もあるかな。体が疲れて倒れる寸前まで行かないと眠れないんだ。」

「不眠症？困ったわね。」

古林は、南の向かいある椅子に座った。皮のソファは柔らかく、彼女の体はゆっくりと沈んだ。その感触だけでも、十分眠りを誘う力はあるのに、目の前の同じ型の椅子に座っている男には全く効果が無いようだ。

「どうだろう。眠りたくても眠れない人は困るんだろうな。でも、僕は別に困ったことはないし、眠る時間が勿体無い気がするんだ。やりたいことは沢山ある。一日八時間睡眠の八時間の間にできることって一杯あるじゃない。大体なんで毎日眠らないといけないのさ。誰が決めたんだろうね。」

まるで子供の屁理屈だと思しながら、古林は彼のために持ってきた毛布を自分にかけた。長い足は布団の中に隠されたが、綺麗なシルエットが布越しに映し出されている。

「局長があなたに会いたいわ。」

「あのフサフサの髭を引っ張ってもいいなら、会ってもいいよ。」
「子供みたいなこと言わないで。」

「ちょっと待つてよ。ここで寝るの？」

「もう夜中の二時よ、泊まった方が楽だわ。」

南はボリボリと頭を掻いた。

「他の部屋に行けば。」

「駄目。あなたがいなくならないよう監視させてもらうわ。」

「そういつ、はつきりとした物言いは十年前から変わらないね。」

南は顎の下に手を置いた。黙って足を組んで座っていると若くして巨万の富を得た社長、と紹介されても信じてもらえそうだ。古林の足のラインを、つま先から付け根のラインまでゆっくりと視線でなぞった後、困った顔をして瞬きをした。

「僕は、どこにも行かないよ。行くところが無い。君達にしか頼れないし、頼る人がいない。僕が未来から来たなんて言っても誰も信じてくれない。M N Kみたいな変な組織しか信じてくれないよ。」

「変な、は余計よ。」

「お金も何も持つてなかったし、未来に帰る手段も今の僕には無かった。だから、本当に必死だったんだよ。この三ヶ月は。」

俯いて静かに話すところは、まるで余命いくばくも無い男の様だ。ころころと印象の変わる目の前の男は、どこか嘘臭くて信じがたい。南という人間を固有名詞として頭のメモリーに登録したくても、上手くいなくて口から出る言葉は、結局は『あなた』とか『この人』となってしまう。

「あなたと初めて出会った日の事は忘れろと言われても、無理だわ。まあ、今日はあまりに汚い格好だったから、あなただって始めはわからなかったけど。」

「それでも僕は会えて嬉しかったんだ。何度も警備に追い返されたからね。だから会ってくれて本当に助かった。美智子くんが僕の事を覚えていてくれて本当に良かった。」

囁く声が、彼女を不思議な気持ちにさせている。

「ありがとう。僕を覚えていてくれて。」

南が感謝の気持ちを込めたつもりで、古林の目を見つめてにつこ

りと笑ったのだが、我慢できなくなったように彼女が首を横に振った。いつも冷静な彼女を知っている南が訳を聞こうと口を開けた途端。

「わ、忘れるわけじゃないじゃない。」

と、何故か下を向いてしまった。よく見ると、顔が真っ赤に染まっている。それを見て南が目丸くした。言いずらそうに手も口元にあてたまま。

「ねえ、もしかして、あれファーストキスだったの。」

「悪い？」

彼女が睨むと、南は申し訳なさそうな顔で合掌した。

「止めてよ、仏様じゃないんだから。」

「うっん、エンマ様に見えるよ。子供の頃にアニメで見た奴にそっくりだもん。」

「もう。」

古林は、呆れてソファに横になった。二十代後半になって『そんなこと』で頬を赤くするなんて、と一番に思っているのは、彼女自身だっただろう。

「寝ちやうの。」

「私はあなたと違って、毎日眠りたいの。」

「怖くないの。」

「どうして怖いのか？」

質問しながら、古林の瞼は半分以上閉じられていた。

「映画とかだったら、もっと違う展開とかあるじゃない。」

「興味がないわ・・・」

それきり、彼女の声は聞こえなくなった。

時計は、五時を指そうとしていた。

アルファが起き上がり、大きく伸びをする。

「本当に、眠らないんだな。」

椅子に座ってじつと動かない男に、黒い犬は恐ろしく低い声で呼びかけた。

「なんだあ。起きてたんだ、アルファも人が悪いな。起きてるのなら話しかけてくれればいいのに。ずっと、寂しかったんだよ。」

「私は少し静かに過ごしたかったんだ。それに、男が振られる様子を笑って見ているのも悪趣味じゃないか。」

「うるさいなあ。」

アルファが人間だったなら、意地悪な微笑みを浮かべているのだろう。

「だが南。いくら意識がはつきりしているとはいえ、体は眠りたいと言っている気がするが?」

アルファがソファに飛び乗った。南が、彼のために場所をあけてくれたのだ。

「睡眠とは、無意味なものではないのだよ。脳が受け取った情報を処理する時間でもある。あまりに起きている時間が長すぎると、生活に影響するぞ。また、夢を見ることも大事なことだがね。潜在意識や溜まったストレスが開放される時でもある。」

「それは良く分かってるよ。美智子くんが言ってたでしょう。僕のこと、不眠症だって。」

南は、ウエーブのかかった前髪を掻き揚げた。前髪で隠れていた所為で解らなかったが、広い額が現れると、利発そうな学生の顔をアルファに見せた。

「でもね、夢を見るって怖いような気がするんだ。」

「怖い?」

「眠りに入る瞬間って、高い所から『落ちる』感覚と似てる気がしない?子供の時よく思ってたんだ。今いる世界と自分とを繋いでいる

鎖があつて、鎖が切れる事で、いろんな世界を漂流してしまう。それが夢という現象なんじゃないか。そして、夢から覚める為には、鎖を捕まえないといけない。出来なかつたら、二度と目覚める事が出来なくて、そのまま死ぬんじゃないかって。」

「夢は、君が作り出した産物でしかない。意識していないだけで、夢に現れるものは今までに君が記憶したものばかりのはずだ。結局は、君が君が作り出した無意識の世界をさまよっているに過ぎないのだよ。」

「でも、そうじゃないと言っている人もいるだろう。夢は全てと繋がっていて、遠くの国で起こったことを夢をとおして見たり、先の未来を見たり。あれを、アルファはどう説明するのさ。」

南は、もうどれくらい眠っていないのだろう。観念したように、うなだれてしまった。

「たしかに、目は覚めていても身体にはガタがきてる。いつもは、それを避けるために僕は赤の夢を見るんだ。」

アルファは鼻を鳴らした。

「ゼータが許しているのなら、私が口を挟むことは無い。君は、ゼータと夢を共有しているという訳か。」

「僕の夢ではなくて、他人の夢を見ることで僕は安心して眠る事が出来るんだ。一人じゃない、僕とゼータは繋がったまま眠っているだから、何があつてもゼータがきつと僕を夢から起こしてくれるんだ。っていう安心感があるのかもしれない。」

「覗きが趣味だったな。ゼータの夢を覗き見ているんだぞ。」

「僕の事、悪趣味だと思ってるだろう。だけど、御蔭様で僕は寝不足で倒れる事が少なくなったよ。楽しませてもらってるよ。」

「何を見た。」

「君達をみたよ。アレフ。」

アルファは、不機嫌そうに目を閉じた。だが、どこか楽しんでいる風にも見える。南が、かつて呼ばれていた呼名で自分のことを呼んだのが嬉しかったのかも知れない。いや、気のせいだろう。アル

ファは、何かを懐かしんだり、愛しく思う事など無いのだから。

「リアルすぎて、どちらが現実なのかわからない位だ。」

南の目が、ゆっくりと閉じられてゆく。

「ゼータに会いたいかな？」

「うん。僕を未来に帰してくれる？」

「もう少し、事情を把握してからなら、かまわんよ。」

「それは、僕もおなじ気持ちだ。」

アルファが、南の膝の上に頭をおいている。

落とされた瞼が眠りにつく為ではないことは、もうお分かりだろう。

「僕をこんな目に合わせたアイツ。許せない。」

もう一度開けられた目には、鋭利な光が宿っていた。

女子高生は知らない

むせ返るような異臭。

閉まりきっていない蛇口からは、水滴がぴたぴたと落ちてゆく音がする。それは、時計の秒針の様に規則正しい音を刻んでいるが、中には耳を劈くような大きな音が狭い空間を通り抜ける時がある。地鳴りのような轟音のなかで、南はやつと意識を取り戻すことが出来た。

何度も口から吐き気された時に付いたと思われる血痕が床のタイルにこびりついていたが、大半は南がもたれ掛かっている便器の中に収まっていた。その量からして、彼の命が助かる見込は絶望的だった。

病院にも行かず駅のトイレの個室に閉じこもったのは、誰かを待っているからだ。

荒い息を押さえることも出来ず、壁に持たれて目を閉じる。

「こ……れは……夢?。」

彼には、もはや何が現実なのか区別ができていないようだ。

「やってくれたな。」

南のものでは無い別の人間の声が、聞こえてきた。

「白昼堂々とホームに飛び込み、時間を戻して無かった事にした。おふざけのつもりか?」

便器の上にオスワリしている黒い犬がこちらを睨みつけている。その顔付きは南の記憶の中にはない初めてみるアルファの表情だった。

「アルファ・・・来ると思ったよ。」

「何故、俺の名前を知ってる。」

南が説明しようと口をあけると、大量の血液が溢れ出した。

「言わなくてもいい・・・どれかの持ち主なのはわかってる。」

薄れゆく意識の中で、南は頷く事が出来た。

「馬鹿な男だ。お前が起こした世界の歪みを直すのに、お前の体一つで間に合えばいいが。あれだけ第三者を巻き込んだんだ。かかる負荷は大きいだろう。」

その間にも、血が一面に広がって床を真っ赤に染めた。タイルの凹凸で怪しく光る朱は、南が子供の頃に怖くて触れなかった庭の薔薇の花の色によく似ていた。片手でその朱を掴んでみると、ねつとりと指の間を摺り抜けて、それはもう二度と会えない誰かを表しているようだった。

「誰が許した。結果が解った上でやった事なのか？」

力を振り絞って、南は彼の名前を声にだすが上手く発音できない。

「お前の持ち物ではないのか。」

「に・・・人、間だった。」

「人間・・・か。」

アルファはボリボリと耳を掻き始めた。

言いたい事を我慢している癖だ。

「助けてやろうか。」

「優しい・・・んだね。」

「愚かな。聞きたいことがあるから助けてやるんだぞ。」

アルファが床に降り立つと朱い波紋が幾つもできた。真っ黒な犬の足に付いた血液は決して彼を染め上げることは出来ない。恐れをなしたようにゆっくりと血の海がアルファから退いてゆく。

「うっ！」

南が苦しみ始めた。

「荒療治だが、我慢してくれ。」

朱い波はゆつくりと南の中へと吸い込まれていった。

「あ、ああああ。」

暫くもがき苦しんだ後、南は大人しくなった。額にはうっすらと汗が浮いている。

「・・・優しくしてよ。」

「これが精一杯だ。これぐらい戻せば死にはしないだろう。」

アルファがブルツと震えた後、「それで、君は奴と一体どういう関係だ？」と問う頃には、青白かった顔に生気が僅かに戻っていた。

「何でも知ってると思ってたのに、知らないこともあるんだね？」

「冗談を言っている場合かね。」

「あと、十年すればわかるよ。」

ばたん

個室のドアが開けられ。そこには、男が立っていた。

旅の終わり

「ねえ、もう十時よ。」

南が目を開けると、古林の綺麗な奥二重が覗き込んでいた。

「僕、寝てたんだ。」

「寝れたのね、良かったわ。」

彼は頬をつまむと、その痛さに顔をしかめた。

「ホント、自分でもびっくりだよ。」

局長と南の会話は、淡々と進められた。

昨日の古林との遊びのような会話は何だったのだろうと、彼女が後になって怒りをあらわにしたのは当然の事だった。

ただ、最後まで南は自分の本当の名前を言うことは無かった。

長い足を組んで腕を組むと、彫刻のようになってしまふ。その様子は、美術館に収められている作品の様にみえる。睡眠をとった所為か、やけにサッパリとして映画俳優でも比較的若い女性に人気がありそうな雰囲気をもし出していた。

「僕は、ある男の力によって過去にタイムスリップさせられた。多分、それは何かの事件に利用するためだったんだと思うんだけど。それを、アルファに救ってもらったんだ。けどね、送られた時代が中途半端すぎるんだよ。だからさあ、もう一度アルファに僕の存在する本当の時間に戻してもらおうと思って。」

榛原局長は、始終ぼかんとした顔で南を見つめていたが、どういう頭の回路になっているのか、しばらく経つと頷いて「よく解ったよ」と頷いた。

「ようは、君が『持ち主』だから正体不明の男に狙われたんじゃないのかね？君を狙った男がどうして時間を操る事ができるのかは解

らんが……。まあ、大方そういう事だろうな。」

「ちよつと、局長。受け入れるのが早すぎじゃありません？」

隣に座っている古林が腑に落ちない顔で髪を撫でている。朝起きたときに付いていた寝癖が気になって仕方が無いのだろう。

「古林君。君は自分の仕事を忘れてはいないだろうね。」

早朝から手直したメイクがばつちりと彼女の顔を引き立たせている。パチパチとひよこの様に瞬きをしてもマスカラがしっかりと振り落とされる事無く、動きについてゆく。

「君はね、M N Kの職員なんだ。不思議な事件をすんなりと受け入れないでどうするね。空を飛んだお婆さん、神通力のある子供、発光する赤子だつて見てきたじゃないか。それを、タイムスリップぐらいで騒がれちゃ困るよ。」

「それは……。」

「それにね、アルファだつて関わっているんだろう。私はこれ以上踏み込んで良いものか……。そっちの事を考えてしまうよ。」

アルファは、南の横に座ってじっとしている。

「この南という男は、ゼータの持ち主だと言っじゃないか、アルファ。信じて良いんだろう？」

耳の後ろを掻く癖が始まった。

「多分。その辺は、な。」

「だけど、何度も言うけど。僕はこの時代の人間じゃないからね。君たちは僕を近い未来で見つける。だから、その未来を僕はできれば変えたくないんだ。素敵な思い出だったから……。だから本名は教えないし、何者かも言いたくない。」

「局長。この人こういう自分勝手な人なんですよ。」

「どこが自分勝手なのさ。僕ら持ち主は、M N Kと連絡を取る必要なんて何も無いんだよ。勝手に僕らを探しあてて監視してるんじゃないか。」

「それは……。」

「まあ、必死なのは解るよ。そりゃあ今、僕の素性を知れば、君たち組織からしちゃあ探す手間が省けるかもしれないけど。でも、M
NKが本当に欲しがっているのは別の物なんだから構わないでしょ。」

このとき初めて局長の顔色が変わった。

「君は、一体何を知っているんだね。」

南はその変化を楽しんでいるようにも見える。

「趣味が時間旅行なものでね。」

アルファが南の膝の上に乗った。

「これ以上、お前が話すことは無いんだろう。なら、さっさと元の時間に戻してやるから。しばらく黙ってくれないか、こんな賑やかな男は初めてだ。」

「お、お、重いよお。」

榛原は、まだ何か聞きたそうな顔をしたが、アルファの顔色を伺って聞くのを止めた。古林が、南に近寄って細い指を肩に置いた。

「あ、アルファ・・・まってよ。僕的美智子くんが何か言いたそうに・・・。」

「・・・あつ。」

目の前の男は姿を消してしまった。

「聞こえなかっただろうね。」

榛原が立派な髭を撫でると、なぜだか穏やかな空気が流れる。

古林がつられて優しく笑った。

「仕方ありませんね。また、会ったときに言うことにしましょう。」

ゼータの見る夢

右肩に軽い痛みを感じる。

これは大体いつものことだから僕は無理に起こそうとはしない。子供のような寢息をたてて眠っている彼を起こすのは可哀相だ。『階段を踏み外した時の転落する感覚が夢に入る瞬間に似ている』と彼は言ったが、本当は目がまわる感覚に似ていると言われている。万華鏡をクルクル回すと見える、あの幻想的な世界に僕は入っているのかも知れない。穴を覗くと、外見からは考えられないような無限の世界が広がっていて、視界にある全ての物が絶えず変化を続けている。その世界を喜んで受け入れる人間もいれば、拒絶する人間も確かに存在するのだ。

彼はきつと驚くだろうな、僕の事を現実主義者だと、いつも文句を言うから。

「やあ。」

姿形は変わっていても夢の中ではすんなりと受け入れてしまうように、僕は自然と懐かしい人間の名前を呼んだ。

僕らの目の前に座った男は、僕の良く知っている男だったからだ。

彼は、「今は違う名前で呼ばれてるんだ」と首を振った。

「彼を少し借りても良い？」

「久しぶりに会ったのに第一声がそれなの？ だけど、どうして？」

「どうしても。」

その後ろにもう一人立っている。

「やあ。」

彼もよく知っている男だった。

当たり前だ。

彼は僕のすぐ側で眠っている男だから。その男は僕にもたれて眠っている男よりは、髪も伸びていたし細く竄れていた。まるで二、三ヶ月ろくに食事を採っていなかったようだ。

「僕を美智子くんに会わせるつもりかい？」

間に挟まれた男は薄い笑みを浮かべた。

「まるで合わせ鏡みたいだな。同じ顔の男が二人いるなんて。」

「同じ顔なのは当たり前だよ。そこで寝てるのは僕本人なんだから。」

僕は今起こっている状態が理解できないままでいることに苛立ちを感じていた。眠っている彼を起こしたくはないし、かといってこのまま目の前の男にも渡したくない。そしてその向こうにいる同じ顔の彼は、僕が最も聞きたくない台詞を口にした。

「彼の言う事を聞いてよ。ゼータ。」

いつもはそんな風に僕の名前を呼ばない。こう呼ぶ時は、彼の言う事に従うしか無い事を長年の経験でわかっていた。

「いいのか？」

間にいる男は振り返って彼を見つめる。

「君が僕を過去へ誘拐しないと、僕の知っている未来にならないみたいなんだ。つまり、君が起こすことはすでに歴史を動かす歯車のひとつということだよ。」

疲れて、竄れた顔の中にキラキラと好奇心の目が光っている。こうなると、誰も彼の好奇心を止められない。

僕は抵抗できないまま、熟睡している彼を奪われてしまった。

「本当に、これで良いんだな。信じていいんだな、ミナミ。」

遠くで自分を見守っている彼に問い掛けてみる。だが、その顔に

後悔の色はなかった。まるで祭の準備に胸膨らませている子供のよ
うにワクワクしているのが、僕を呆れさせた。

「大丈夫だって。僕はちゃんとこの場所に帰って来てるじゃないか。
ねえ・・・そうだろ、ギーメル？」

『ギーメル』は笑った。

「どうやら、そのようだ。」

ミナミは真剣な眼差しになって、旅立つ男に最後の言葉を吐いた。
「だけど、覚えておいて。僕は絶対君を見つけて、一発殴らせても
らうからね。こんな散々な目に合ったのは初めてだ、君を絶対に許
さないよ。」

「わかった。」

言葉が部屋にずっしりと重い空気を残している。部屋には彼と僕
しかいなかった。

「シヤク。僕がいなくて寂しかっただろ？」

「いや、さっきまでこの場所にいたからな。」

ミナミが欠伸をしながら腰を下ろす。

「ここに帰ってくるのに三ヶ月かかったんだ。」

「ふうん。」

「アルファに頼んでね。」

「そうか。」

「ねえ。」

さっきと同じように右肩に頭を乗せる。体温がじんわりと僕を暖
めてゆく。

「少し休みたいんだ。」

「困ったな。」

僕は彼を虐めてみたくなった。彼は僕に何も説明してくれないか
ら、少し腹がたって困らせてやろうと思った。彼はきつと眠りたく
て仕方が無いのだろう。

「さつきまで、夢なら見てたじゃないか。」

「それは、さつきまで此処にいてた方の僕だろう。言っただじゃないか三ヶ月ろくに眠ってないんだって。さすがに体がもたないよ。」

「じゃあ、ミナミの夢をみさせてよ。」

僕が彼と出会ってから、一度でも彼が自分の夢を見たことはあったのだろうか、僕のいなかった三ヶ月間、彼は夢を見たのだろうか。いいよ……一緒にいてくれるなら。」

ミナミは、本当に疲れているようだった。乱暴な返事をした後、何も言わなくなったので僕は彼の意識を繋げる事にした。何も知らない三ヶ月の記憶を僕は知ることができるだろうか、夢は記憶の断片を映し出す事もあるから。

夢の中でミナミが僕を見ている。

一本の鎖を持って立っている。

僕が彼の手を握って頷くと、安心したように鎖を手から離れた。その瞬間。

無重力状態になるのは、体が落下する事を教えてくれる。

僕がしっかりと彼の手を掴んで離さない。

優しく笑って、僕の赤い瞳が彼の瞳に映るのが分かるくらいじっと見つめて。

僕は、そうして彼の夢を見る。

黒い犬は夢をみない

逃げ出した彼を見つけるのに、たいした時間はかからなかった。ホームから点々と落ちている血痕を辿ると、地下のトイレに続いていた。鍵の掛かった個室から、話し声が聞こえる。俺は、勢いよくドアを蹴破った。

驚いた。

個室には、顔色の悪いミナミと、真っ黒な犬がこちらを見ていた。俺は、この黒い犬が何者か知っている。だが、あちらは俺が何者か解っていないようだ。まあ、無理も無いか。この時のアルファには解るわけが無い。

「これは、お前の仕業か？」

アルファが確かめる様に問い掛けた。

「やあ、アレフじゃないか。久しぶり。」

そう言えば、勘のいい彼の事だから気づいてくれるだろう。アルファは、久しぶりの再会を喜ぶ様子もなく「間違いないようだな」と、言った。相変わらず、冷たい男だ。

「今は人の名前で呼ばれてるんだ。」

「お前は体を離れるのが嫌だったからな。よかったじゃないか。」

「そうだね、今じゃ俺にも母親がいるんだ・・・優しい人なんだ。」

「人間として、生きられないのか？」

何か哀れむような目でこちらを見ているようで、気分が悪い。

「それが出来ないのは君が一番よく解っているだろう。」

同じ人間に見えても表面だけで、薄っぺらい皮を被った別の生き物なのだ。そんな事は解っているが、アルファの言葉が胸に刺さった。俺はこれ以上話を続けなくなかったので、横になったまま動かないミナミの体を掴んで個室から引きずり出すことにした。

「まだ使える男だ。返してもらっよ。」

アルファが、大きな声で吠えた。

「無駄だよ。」

俺の邪魔をする奴は許さない。

「君は、まだ僕が素直で聞き分けの良い弟だとも思ってた？」

疲れた溜息が聞こえた。

「俺も長い年月の間、とても孤独だった。そのうちに考え方も変わったんだ。」

「お前は何も変わっていないよ、ギーメル。」

「そんなことは無い。変わったんだ、アレフ。ちゃんと見てくれ。」

「外見だけだ。」

「俺は人間なんだよ。」

がたんがたん

電車の音が大きく反響し始めた。音が地面を割るように、天井に亀裂が入った。

「歪みだ。」

アルファが、残念そうに呟いた。

「この代償は、彼に償って頂こうか。」

黒い犬が床を蹴った。

一体どこから吹いているのだろうか、強い風が足元から突き上げるように上空へと向かってゆく。天井が落ちるのを食い止めているのだろうか、それを俺苦笑しながら見つめた。

さらに、風は勢いよく自分の方へ叩きつけられる。思わず目を閉

してしまった事を、俺は後になって後悔した。

掴んでいた南を、アルファに奪われてしまったのだ。

「どこにやったんだ。」

「さてね。」

アルファが、ぶるつと首を振った。風が止んで、押さえつけられていた天井が崩れ落ちる。

「アルファ！」

落ちてくる瓦礫に視界を奪われ、俺は動けなくなっている。

「お前は少しも変わってない。ツメが甘いところは確実に。」

白い煙の中へアルファは、消えていった。頭の上に、巨大な金属が降りかかってくる。

「くそつ。」

体が潰れるような感覚に襲われる。

恐ろしい叫び声を上げて、ベッドから飛び起きた。

「どうした？」

誰かが、俺の腕を掴んで名前を呼んでいる。

「わ・・・悪い夢を見たみたいだ。」

「そうか、コーヒーでも飲むか？」

「頼みます。」

世界ががらりと変わったので、まだ頭が朦朧としている。

まただ。

よく見る夢の続きだ。

頭が痛くて手で触れてみる。

白い埃がパラパラと空を舞った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4304r/>

ゼータの見る夢

2011年4月19日00時10分発行